



◀ 左から、木村さん、井野口さん、鈴木さん

被災地で見えてきたもの ～女性だからできること～



特集

東日本大震災から半年。被災地へ足利からも多くの方がボランティアとして赴いています。

去る6月の「がんばろう東北！」応援プロジェクト足利の風（鈴木光尚代表）のボランティアバスに乗られた女性3人の方に、その目で実際に見てきたこと、感じたことを語っていただきます。

被災地へ行ってみたい

編集委員（以下、編）●実際に被災地へ行った感想をお聞かせください。

鈴木●実際に見たときは、ショックで言葉にならなかったです……。

井野口●一瞬で失った日々の生活……今までに見たことのない光景に震えました。本当に胸が痛みました。

木村●以前から岩手と交流があり、震災後「市や県にお願いしても何も届かない」という声を聞き、盛岡へ向かいました。人手はほしいのに、ボランティアが留まる場所がないという状況でした。制約が多いから、場所を探すのも困難。ボランティアに行くときはまず、どこで何をするのか確認してから現地へ行き、要るものは置いてくる、要らないものは置いてこない、初めのうちには歩く人をつかまえて何がほしいか聞くような活動でした。

物はあるのに届かない

編●活動していて、強く感じたことは何ですか。

井野口●ある避難所に行った時に行政と被災者との感覚のギャップが大きかったですね。支援物資は人数分ないと配布しない。「これは持って帰ってくれ！」と言っ行政の対応に腹が立ち悲しくなりました。2ヶ月以上もおにぎり2個の生活で我慢している被災者からは、温かな物を口にしたいと聞き、持って行った手作りのカレーをその場で食べてもらいました。避難所の格差を無くしてほしいですね。



木村●せっかくなのであげられるものがあったとしても、「自分だけ、一人だけいい思いはできない」と受け取らない方もいました。あげたい、もらいたい、でも物は動かない。思っただけが行き交うシリンマがありました。

編●物資を受け取るのに、黙って並んでいる日本人を見て、不思議だと言っている外国人の方がいました。日本人はなんて辛抱強い人種だろうと。こんな光景が信じられないそうですね。日本人の道徳性は非常に強いという印象があるようです。

コミュニティが必要

編●コミュニティの問題が出ています。避難所から自分だけ動くと、コミュニティから孤立してしまう。かといって避難所で新たなコミュニティを築くのもリーダーが出せない。

井野口●そうですね。コミュニティの必要性は強く感じますね。お年寄りなどは不安でしょうね。避難所では「一人でない」という安心感があるから頑張れる。やはり人の情が支えになる部分は大きく重要だと感じます。

鈴木●一人になってしまつと、前向きに考えられないです。命の安全が確保されると、次は生きがいといった心を支えるものが必要になってきます。

女性だから気づくこと

編●阪神大震災のときに、女性への支援の在り方が問題になりましたが、女性というところで何か感じたことは？

木村●支援の遅れは、行政の現場がなくなつてしまったことが大きいですが、ただ、女性が被害にあう可能性が常につきまತ್ತった状態での避難生活であることは否めません。女性の声をあげる

これからのボランティア

編●これからどのような活動をしたとお考えですか。

木村●支援される側も誰かの役に立ちたいと思っています。間接的に心や生きがいを支援する何かをしたいと思えます。

井野口●今や「地球家族」という思いが広がっていますよね。被災者の声を実際に聞き何が本当に必要かを確かみながら、お互いの顔が見えることによ

り、心が開かれて安心感が生まれます。そんなホットな支援をしていきたいですし、日常の中でもこころの平和を意識しながら人との縁（えにし）を大切にしたいですね。

木村●女性特有のおしゃべり好きな部分や世話好きな部分が、きつと役にたつと思います。これからも、人との交流を続けていきたいと思っています。

編●女性ならではの意見を聞いたような気がします。コミュニティの問題は被災地だけではなく、自分の地域にも当てはまるような気がしました。コミュニティの主軸は、女性のように感じました。これからも、ぜひ女性の力を発揮してほしいです。本日は、お忙しい中お話を聞かせいただき、ありがとうございました。

●インタビュー 6月21日(水)
足利市民活動センターにて
参加者

- 木村克子さん
- (AKG 23 足利着物ガールズ代表)
- 井野口利恵さん
- (PSA協会 スタッフ)
- 鈴木礼子さん
- (足利市民活動センター長)
- かけはし編集委員